

# Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 26 mars 2013

Le livre des poèmes sur les Dieux  
du *Shin-Kokin-shû*

• 1852

しるらめやけふのねの日のひめこ松

おひんすゑまでさかゆべしとは

この哥は、日吉社司、社頭のうしろの山にまかり  
て、子日して侍ける夜、人のゆめに見えけるとな  
ん

• 1853

なさけなくおる人つらしわがやどの  
あるじわすれぬ梅のたちえを

この哥は、建久二年のはるのころ、つくしへまか  
れりけるものゝ、安楽寺の梅をおりて侍ける夜の  
ゆめに見えけるとなん

東風(こち)ふかば匂ひおこせよ梅の花 主な  
しとて春な忘れそ

菅原道真

• 1854

ふだらくのみなみのきしにだうたてゝ  
いまぞさかえんきたのふぢなみ

このうたは、興福寺の南円堂つくりはじめ侍ける  
時、春日のえのもとの明神、よみたまへりけると  
なん

補陀落 Potalaka

• 1855

夜やさむき衣やうすきかたそぎの  
ゆきあひのまより霜やをくらん

住吉御哥となん

- 1264 俊恵法師

住吉の松の行合のひまよりも

月さえぬれば霜はおきけり

- **1856**

- いかばかりとしはへねどもすみの江の  
松ぞふたゝびおひかはりぬる

この哥は、ある人、すみよしにまうでゝ、

- 人ならばとはましものをすみのえの  
まつはいくたびおひかはるらん

と、よみてたてまつりける御返事となんいへる

- 古今集 雑一

住吉の岸の姫松ひとならば

いく世かへしと問はましを

- 伊勢物語 百十七段

われ見ても久しくなりぬ住吉の

岸の姫松いく世へぬらん

• 1857

むつましと君はしらなみみづかきの  
ひさしきよゝりいはひそめてき

伊勢物語に、住吉に行幸の時、おほんかみ、げ行  
したまひてとするせり

現形

- **1858**

- 人しれずいまやいまやとちはやぶる

神さぶるまで君をこそまで

- このうたは、待賢門院の堀河、山とのかたよりくまのへまうで侍けるに、かすがへまいるべきよしのゆめを見たりけれど、のちにまいらんとおもひて、まかりすぎにけるを、かへり侍けるに、託宣したまひけるとなん

- **1859**

みちとをしほどもはるかにへだゝれり

おもひをこせよわれもわすれじ

- このうたは、陸奥にすみける人の、熊野へ三年まうでんと願をたてゝまいりて侍けるが、いみじうくるしかりければ、いまふたゝびをいかにせんとなげきて、おまへにふしたりけるよのゆめに見えけるとなん

- 1860

おもふこと身にあまるまでなる滝の  
しばしよどむをなにうらむらん

- このうたは、身のしづめる事をなげきて、あづまのかたへまからんとおもひたちける人、くまのゝおまへに通夜して侍けるゆめにみえけるとぞ

• 1861

われたのむ人いたづらになしはてば

又雲わけてのぼるばかりぞ

賀茂の御哥となん

• 1862

かゞみにもかけみたらしの水のおもに  
うつるばかりの心とをしれ

これ又、かもにまうでたる人のゆめに見え  
けるといへり

- **1863**

ありきつゝきつゝ見れどもいさぎよき  
人の心をわれわすれめや

- 石清水の御哥といへり

- **1864**

にしのをみたつ白浪のうへにして

なにすぐすらんかりのこのよを

- このうたは、称徳天皇の御時、和気清麿を宇佐宮にたてまつりたまひける時、託宣し給けるとなん
- 孝謙天皇